

サピア、イエスペルセン、国際補助語

Sapir, Jespersen and International Auxiliary Language

渡部良典
Yoshinori WATANABE

上智大学
Sophia University

日本エドワード・サピア協会 研究年報 抜刷

平成 25 (2013) 年 3 月 東京 第 27 号

サピア、イエスペルセン、国際補助語

Sapir, Jespersen and International Auxiliary Language

渡部 良典
Yoshinori WATANABE

上智大学
Sophia University

The present paper is a review of the book entitled *International communication: A symposium on the language problem*. The booklet, which was published in 1931, contains three papers written by Shenton, Sapir and Jespersen, all arguing for the importance of establishing an international auxiliary language for the sake of better international communication. Meanwhile, an attempt is made to cast light to the fact that Sapir and Jespersen, two world-renowned linguistics and contemporaries, were in favour of an artificially constructed language over an existing natural language based on their long-standing scholarship in linguistics. In order to do so, the authors' major arguments running through each of the three chapters are summarized and placed in the historical milieu, where the papers were produced, thereby revealing the contribution that linguistics has been making and will continue to make to the external world event.

国際補助語論の現在

現在、実質上の国際補助語は英語という自然言語である。国際理解を促進し、そして異文化を理解することは英語教育の重要な目的の一つであるとされていることに疑いを持つ人はまれである。国際コミュニケーションの手段としての英語を示すEIC (English for International Communication) や世界共通語としての英語ELF (English as a Lingual Franca) は言語教育の分野では世界共通の語彙となつつある。また、わが国ではTOEIC (国際コミュニケーション英語能力テスト) の受験者数はコンスタントに増え、2011年度は述べ二百万人以上が受験しており、一定の得点を昇進の条件としているという会社まである。英語を公用語にすべきだということが真摯な議論の対象になり、社内では英語でコミュニケーションすることという優良企業もある。

しかし、英語が実質上の国際補助語としての地位を確立したのはせいぜい第二次

世界大戦後のことであり、それは多分にアメリカの国際的な地位の向上に負っているというのが、好むと好まずにかかわらず常識的な判断であり、疑う余地のない事実である。一つの自然言語がこれほどの影響力を持ち、国際共通語としての役割を果たしたことはバベルの塔以降かつてなかったと言ってもよいであろう。確かに、ヨーロッパにおける学術研究ではラテン語の時期が中世から長く続いたし、医学はドイツ語というように特定の分野において支配的な地位を占める言語が存在したということはあった。しかし、現代の英語はこのような分野を超えた通用性にある。マクナイトはその英語史¹を、広東出身の若い学生と上海出身の若い女性が恋に落ちた。互いの言語が通じないので英語を使って意思を伝えることができた、というエピソードで始めている。彼はこの逸話で英語が国際語であることを伝えたかったわけではない。むしろ英語はつい最近まで国際語と呼べるような言語では到底なく、英国国内でも方言の違いで互に通じないということが常態だったということをもってその浩瀚な600頁の英語の歴史を語り始めているのである。ついでながらこの章のタイトルはChaos（混沌）である。

人工言語としての国際補助語論

英語が世界語となってから一世紀もたっておらず、それ以前、国際補助語論が盛んに行われた時期があった、というのは言語にかかわる研究者として知っておくべき事柄の一つであろう。17世紀、ベーコン、デカルト、ライプニッツなどの哲学者が普遍的な人工言語を考案したことはよく知られている。しかし、彼らの目的はむしろ論理学における演算子のような言語の構築を目指したのであり、曖昧さを排除した確実なる思考を行うことが目的であった。一方母語の異なる人々の交流の関係を促すための手段として人工的な補助語を構築しようという試みがあり数多くの試みがなされたのである。その中には、ヴォラビューク（1879年、ドイツのカトリック司祭シュライヤーが考案）という今では忘れられた言語もあるが、エスペラント（1887年、ポーランドのユダヤ人眼科医ザメンホフが考案）のように今日でも800万人が補助語として使っているとされる言語もある²。19世紀後半に起こったこのような動きは、あたかも印欧共通基語（印欧祖語）を探ったいわゆる青年文法学派の台頭と軌を一にするかのようである。ヘルマン・パウルの『言語史原理』が出版されたのは1880年だったことを思い出してもよいであろう。

国際補助語推進者としてのイエスペルセンとサピア

国際補助語推進者の中には言語学者も数多くおり、イエスペルセンとサピアという言語学の巨人も熱心な国際補助語推進論者であった。イエスペルセンは*Modern English Grammar*全7巻の大作をはじめとして、英語に関する数多の著書があ

り、チョムスキー以前、英語学界では最も多く引用される海外の学者であったと言われる。しかし、イエスベルセンは敢えて英語を国際補助語とすることには異議をとなえ、そして国際補助語としてノヴィアルという人工語を推進した。このことは、*The philosophy of grammar* や、*Language, mankind, nation and individual* などの著書にざっと目を通すだけでも彼がいかに博學で多数の言語を知るには十分であり、必ずしも意外とは言えない。一方、多様な各言語の相対的価値を認め、各言語の気質 (temperament) や特性 (genius) を認めたサピアからすると、世界共通語の国際補助語の推進者というのが馴染まないかもしれないが、やはり、言語の多様性を透徹した眼で観察し理解した天才だからこそ、自然言語はどの母語話者にも完全に中立で理想的な補助語とはなりえないという限界を知り、国際補助語を人工的に構築することに熱心だったという逆説が成り立つのだろう。彼の主著『言語』には“Language is in many respects as unreasonable and stubborn about its classifications as such a mind.” (99 頁) 等、言語の不確性を雄弁に述べた個所がいくらかでも見つかる。

しかし、まことに不思議なことにこの二人の著書には互いの名前が参照されていることは極めてまれである。長寿のイエスベルセンは 1860 年に生まれ、1943 年に 83 歳で亡くなっている。一方、早逝のサピアは 1884 年に生まれ 1939 年に死去、享年 54 歳。イエスベルセンはサピアより 24 年早く生まれ、サピアの 4 年後に死去した。したがって、この偉大な二人の言語学者は同時代人である。互いに影響関係にあっても不思議はない。しかし、実際には、イエスベルセンの著書でサピアに直接言及されることも、またサピアの著作でイエスベルセンを参照することも意外なほど少ない。

国際補助語論シンポジウム

International communication: A symposium on the language problem. London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co. Ltd. はこの意外な取り合わせを紙上シンポジウムという形にまとめたものである。文庫本の大きさで全 120 頁、一晩で読みとおすことのできる小さな本である。出版年は 1931 年。4 頁の序文を寄せているのは C. K. オグデン —『意味の意味』(1930 年出版) の I. A. リチャーズとの共著者—である。彼は、この本の出版に先立つ 4 年前の 1927 年、Orthological Institute³ という研究所を創設し、850 語に簡略化した国際共通語としての英語、ベーシック・イングリッシュを推進した。本書は *Psyche Miniatures* というシリーズの中の一巻、37 巻目である。表紙の裏には“Published in connection with *Psyche: A quarterly journal of general and applied psychology*”との記載が見えるが、オグデンはこの雑誌の創始者の一人である。この企画の発案者は明示されていないが、おそらくオグデン

であろう。彼自身は、英語という自然言語を簡略化して国際共通語の構築を目指しているが、本書で3名の研究者が人工国際補助語について述べていることは議論の余地のない (non-controversial in character)、確固とした論述であるとしている。続く短評で、彼は、シェントンの書いた第1章“A social problem”は「見事に (admirably)」近年の発展の概要を記述したものであると賞賛している。第2章サピアの“The function of an international auxiliary language”については「明晰にして包括的な (lucid and comprehensive)」な論考であり、言語の心理学 (linguistic psychology) に貢献したとし、国民間および個人間のコミュニケーションに関する人類学からの考察を高く評価し、第3章イエスペルセンの“Interlinguistics”については生涯に亘って研鑽を積み現在でもパイオニアであり続けている (proves himself to be a pioneer) 著者の言語研究に基づいた論考であると絶賛している。

社会学者と言語学者の国際補助語論

本書の第1章の著者シェントンは国際補助語政策に積極的に国際会議を開催するなど実質的な貢献を行った社会学者である。ビジネスが国際化していること (business amalgamations on a national scale)、交通が便利になり世界が狭くなりつつあること (transportation and communication make the world a neighbourhood) 等を通して、‘planetary consciousness’ (今でいえばグローバリズムということになるだろうか) が生まれつつあるという状況を示して国際補助語必要論を始めるのだが、国際補助語の必要性を支持する論拠は、現代英語を国際語と主張する論拠と変わるところがない。

更に、国際会議の増加の状況、そこで使われている言語が多様であり、通訳・翻訳に如何にコストがかかるかということを具体的に指摘しながら、共通語の必要性を主張する。そして、共通語構築のためには、全くの人工語ではだめで、現在行われている自然言語 (speechways) とともに人間の有り様 (folkways)、つまり人間に可能な言語の普遍性を特定しそれに基づいて補助語を構築すべきだとしている。著者は、すでに「言語帝国主義 (linguistic imperialism)」(34頁) という言葉を使って、ある特定の言語を国際共通語とすることは公平性を欠き、一国だけが得をすることになる状況を招くと懸念している。また世界各国の外国語教育の状況についても論じており、(その中には日本における英語教育必修化の動きも指摘している)、そのコストは莫大なものであり、どの国でもそれに見合う成果は期待できないということも述べている。そこで非常に簡単な国際補助語を習得した方がずっと有益であろうというのである。

第2章で、サピアは、自らの体験を述べ、国際会議などで参加者と十分にコミュニケーションをすることができずに不自由をするという主旨のことを述べている。

サビアは、国際補助語はどの言語の話し手にとっても心理的に同じように遠いものである (equally foreign) が必要だ、つまりどの言語を母語あるいは母国語とする使い手にとっても公平であることが条件であるとするのである。さらに、使い手が、言語に使われる (the servant of language) のではなく、言語の使い手 (the master of language) であるという感覚が必要である、したがって、現在使われている言語は好ましくなく、中立的な人工言語の構築の必要性を主張するのである。共通語は単純 (simple) であり、規則性 (regularity) と論理性 (logic) に富んでいることが必要であるとする。英語は一見この規準に合うように見えるが、それは幻想 (illusion) であり、偽の単純性 (a pseudo simplicity)、隠された複雑性 (a masked complexity) ということを示している。

サビアが概念上の主張をしているのに対し、イエスペルセンの書いた第3章の記述はより具体的である。彼は、ヨーロッパでは少なくとも120の異なる言語が使われているがそれらは互に通じない。しかし、一つの言語を国際補助語にするのは他国の嫉妬心 (national jealousies) を招きやがては国粋主義 (nationalism) につながる可能性もあるので得策ではない。ラテン語などの古典語という可能性もあるが複雑すぎて習得が困難だという理由で、人工言語が必要であるとするのである。その例として自らの考案したノヴィアル (1928年) 等従来行われてきた補助語の特徴を紹介している。

国際補助語の構築は途上であることを認めながらも、すでに実を結びつつあることを、1930年にジュネーブで開催された International Auxiliary Language Association (IALA) (1924年設立) -イエスペルセン自身が議長を担当- の模様を報告しながら例示している。参加者には、シャルル・バイイ等の名前も見られる。報告の中には、オットー・フンケの個人的体験に基づく国際補助語必要論、またモーパッサンの一節をエスペラントその他の人工語に翻訳をしたものを説明付きで読み上げたワークショップの記載もある。このような限られた体験でもすでに、外国語を話したり書いたりする時の「あの窮屈で落ち着かない気分 (the feeling of constraint and uncertainty)」(108頁) を、人工言語であれば十分に対処できることを実感することができた、という具体的な感想も述べられている。会議の最後にあたって、エール大学の Asakawa 教授⁴ の提案で、今後の方針について同意が見られたと結んでいる。すなわち、サビア教授とコリンソン教授の提案した枠組みに基づいた言語の哲学的基礎研究を行うこと⁵、言語の科学的な比較研究を行うこと、国際補助語構築のためにこれらを統合することという3点 (Asakawa's system of three circles) である。枠組みの具体的な内容は書かれていないが、自然言語を深く考察して人間の使える言語を構築することが重要であり、ピジン語やクリオール語の研究なども参考になる、語彙はヨーロッパ語系が多いが、シンタクスはアジ

ア語の要素も入れる可能性等も考慮すべきだなどとしているところから、おおよその推測はできるように思う。そして、国際補助語は必ずや、言語学者、哲学者、医学、科学、技術、政治、商業、旅行等において母国を超えて視野を広げるのに役立つはずだと結んでいる⁶。

世界情勢と言語研究の貢献

サビアの論考もイエスペルセンの論考も、それぞれの『選集』⁷に収められている⁸。しかし、本書では彼らの2篇に加えて社会学者の立場をあわせ、シンポジウムと銘打って出版したことに特別な意義がある。本書が出版された1931年というのは国際的には波乱の幕開けといっても差し支えない時代であった。1929年には世界恐慌のきっかけとなるウォール街の株式が大暴落している。1931年には満州事変が起り、1933年には日本が国際連盟を脱退している。今回この小著を読んで感銘を受けたのは、言語学における二人の巨人があたかも世界の動きから超越して自らの言語研究を進めていた様子が伺われることである。世界の政治に積極的に発言するチョムスキーのような関わり方もある。しかし、他方言語という人間に深く関わる能力と事象の考察を深めながら、その多様性とともによりも普遍性を求めようとしたその熱意が80年以上の時と場所を超えて感じ取ることができ、大袈裟に言えばカントが自らの批判哲学から『永遠平和のために』を世に問うたように、自らの言語研究からやはり永遠平和を私たちに訴えかけているようにも思われた。

サビアは私にとって最も気に入りそして何度も挑戦した言語学者である。卒業論文ではサビアの言語相対論を心理言語学の立場から解釈するというテーマを扱った。『言語』をなんとか理解するために、この古典的名著が口述筆記で書かれたことを知って、期間を置いて2度にわたって全文を音読したこともある。当時渡部昇一先生が、現代言語学の総体を扱った本としてこれほど分かりやすい本はない、今でも読み続けられている名著であるということを書いていらしたが、高校を卒業してまだ4年もたっていない英語力の私には一体いつになったらその深みと軽みがわかるのだろうと絶望するほど難解な本であった。論文指導をしてくださったフェリス・ロボ先生に、『言語』は難しいでしょう、それよりも『選集』の“Language”から始めてはどうですか、とのアドバイスに従い26頁の論考を読んで何とか卒論を書きあげることができたが、私にとってサビアは未だに難攻不落の言語学者である。

私は現在一介の外国語教師であり、言語テストングー言語能力の測定を専門とする。サビアの文献学的な研究も理論言語学も専門外の事柄である。しかし、ともすれば教育学一般の研究に流れがちな専門分野にあって、たえず生きた目の前の子どもたちの言語能力に関心を持ち続けてこられたのは学生時代にサビアと格闘した御蔭である。今回偶然に見つけた小さなモノグラフを同僚の加藤泰彦氏にお話し

たところ、是非本誌に紹介記事を書くようにというお勧めを頂いた。読者の方々には周知のことばかりを紹介したのではないかと案じている。本書に書き記された著者たちの熱意のほんの一部でも伝えることができたとすれば望外の喜びである。

注

- 1 McKnight, G. H. (1928). *Modern English in the Making*. New York: Appleton-Century-Crofts, Inc.
- 2 エスペラントについては、明治 41 (1908) 年発行の三省堂『日本百科大辞典』に、次のような実に的確な記載がある。(旧漢字は一部現代の漢字に書き換えた。)「今日においては意外の盛況を呈し、各國多くは、エスペラント協會の設立を見るが如き有り様となれり。現に我國でも、明治 39 年 9 月其支部を設置せり。…(中略)…エスペラントに置いて通常用ふる語の語根の数は 1900 に過ぎず、これらの語根はローマンス語族及ドイツ語族より選出せられたるものなるを以て、ヨーロッパかく國語に共通なるもの多く、ドイツ人の如きは 800 の新語を學修すれば足るが如き状態にあり。されど…(中略)…他の語族殊に東洋諸語族を度外視したる点に於いて、世界一般の言語としては、なほ不便のものたるを免れざるべし」(1176 頁)。
- 3 この研究機関はその後 25 年ほどで閉鎖した。しかし、近年再び Basic English Net としてネット上でベーシック・イングリッシュの普及に勤めている (<http://www.basic-english.org/>)。
- 4 この Asakawa というのは、比較法制学者朝河貫一(1873 - 1948)に違いない。「日本の禍機」が講談社学術文庫版から出版されているが、その紹介文には「歴史学者としての明解な分析に立って、祖国への熱い思いが格調高く述べられ、読む者の心に迫る」とあるが、本文は「余ひそかにおもえらく、日本は一の機器を通過して他の危機に迫りたりと」(12 頁)といった美文調である。1896 年に 23 歳で渡米して以来 1949 年バーモント州にて死去するまで活躍の場は米国にあった。つまり日露戦争と二つの世界大戦を経験した世代に属する。1931 年は奇しくもサピアがエール大学に移った年であり、朝川教授とは同僚となったわけである。
- 5 具体的にどのような枠組みが示されたのかは記載されていない。
- 6 国際補助語構築の必要性を述べるにあたってイエスベルセンもサピアと同様、普遍的な人間性に言及しているところに興味を引かれる。“This branch of knowledge starts from the conviction that the human psyche has everywhere a common structure, which must find its expression in language and must be capable of a simpler and more uniform expression in a constructed language” (107 頁)。
- 7 Mandelbaum, D. G. (ed.). *Selected writings of Edward Sapir in language, culture and personality*. Berkeley: University of California Press. 1949 年発行、および、*Selected writings of Otto Jespersen*. Tokyo: Senjo Publishing Co., Ltd. 1962 年発行。
- 8 『月刊 言語』(大修館書店)の 1979 年 2 月号は「サピアの言語論」を特集しているが、そこには「サピアの国際補助語論」(鈴木孝夫) (10 - 18 頁)も掲載されている。